

## 〔文献紹介〕

山本武雄著 気候の語る日本歴史

地質時代を別としても、先史時代・歴史時代に生じた海進・海退や、太陽の活動の地球への影響、年輪分析などから、気候変動に関する諸説が主として自然科学の側から出されてきた。地理学関係ではハンチントンが最も有名な例であろう。しかし、自然の変化データを基盤とする自然科学者のアプローチは往々にして歴史文献にうとく、逆に文献からのアプローチでは、たとえ災害史などを研究するにしても自然のメカニズムの体系的把握が弱くて、歴史の背景に対する配慮が少い。ことに自然の変動になると、いっそう包括的な探求を要する。

本書は一般・学生向きであるが、歴史に関心ある者が一読すればいろいろ有益なヒントをつかむことができよう。著者は阪大物理学出身の気候学者で、山口大学名誉教授、現在は徳山大学教授。表題のように日本の歴史時代の気候がテーマであるが、説明の関係上、叙述は古今東西にもわたっている。著者の考え方によれば、歴史は「自然」・「人間」・「社会」が縦糸となり横糸となっているもので、もし「自然」と「社会」を捨象すれば英雄豪傑の絵物語になってしまふ。視点を遠ざけると生産力の発展に応じて人間相互の社会関係の変動する関係が浮び上がるが、それは歴史解釈の手段であつても歴史そのものではない。「自然」は「人間」と「社会」を囲んでしつかり絡みあっているから、「自然」の変化もまた歴史の変化に

対して重要な役割を演じる。

そこで著者は九一―一六世紀の観桜録を手がかりに桜の開花期の変動を示し、多くの大飢饉や産米額記録から豊凶の基となった気候変動を示す。ところが気候変動は日本列島全体が単純に温暖化・冷涼化したのではなく、近代の観測資料分析の結果、ジェット・ストリームの盛衰の関係で、日本の気候がより「モンスーン的」になるか否かという性質があることを証明し、日本の夏の気候変動の特徴を明示することにより、過去の文献の述べる事実を説明している。

さらに著者は古代の気候についても中国などの古文獻の検討により、邪馬台国は小氷期気候下にあつたとしてゐる。鎌倉時代についても、出土木材の<sup>14</sup>Cによる年代測定、その年輪分析、その時代の早魃、霖雨、飢饉の資料などを総合し、平家の極盛の一〇年間が「最適の気候」に支えられていたことなど、日本の歴史時代の気候の動きを、気候学と文献資料その他を駆使して大観し、かつ南・北日本の差についても興味深い叙述をしている。

もちろん歴史はこれだけで解けるものではなく、歴史地理学においてもこの著者のいう「歴史解釈」の手段が大切である。本書はそういう面には触れておらず、また目的でもない。といつて、本書の方法だけで押し進めるならば、気候変動で歴史を解釈してしまおうとしたハンチントンの二の舞になりかねない。その点にさえ留意しておけば、文献史学ではおよそ体系化されないような、歴史の背景としての気候とその変動の理解には大いに有用であろう。

(A5版、二四五頁、そして文庫四、一九七六年第一刷、一九七七年第二刷)  
(由比濱省吾・岡山大学教養部)